

To the Lighthouse における単純さと複雑さ

Woolf とコミュニティ再考

酒井祐輔 Sakai Yusuke

はじめに

Virginia Woolf はこれまでも度々、community という観点から論じられてきたが、その多くは 20 世紀後半以降の人文・社会科学におけるコミュニティ概念を作品分析に応用するもので、コミュニティという言葉の歴史的用法はあまり問題にされてこなかったように思われる。本発表においては、戦間期のリベラル知識人たちがどのような意味でコミュニティという言葉を用いていたのか、という観点からウルフが 1927 年に発表した小説 *To the Lighthouse* について考察した。ウルフの半自伝的な作品として分析されることが多い本作だが、本発表においては社会的なコンテキストとの関連で論じる。この方向性において、本発表は社会主義者 Harold Laski の著作との関連で本作を論じた Micheal Trantner の議論と軌を一にするものである。ただし、本発表はウルフと同時代のリベラリズムとの関係を重要視した。

戦間期の分裂したリベラリズム

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのイギリスにおいては J. A. Hobson や L. T. Hobhouse らのニュー・リベラルが後年の福祉国家論を先取りするような議論を展開し、社会があってこそ個人の可能性が最大化されると説いた。しかし、第一次世界大戦という国民国家同士の総力戦がもたらした惨禍は、若い世代に国家に対する強い不信を植え付け、1920 年代に入るとニュー・リベラルの路線を引き継ぎ国家が経済や福祉に積極介入すべきと考える左派と、国家の役割拡大に慎重な中道派リベラルとの分裂が表面化する (Freeden 90)。戦後経済の安定を重視する中道派は、公的事業と民間事業との間に「正しい線引き」“the correct delimitation” を行い、イギリスの経済と産業を能率的に運用していくことを目指した (Liberal Industrial Inquiry 457)。

興味深いことに、この時期のリベラルたちはコミュニティという言葉や Nation や State、または Society の同義語として好んで用いていた。たとえば Hobson はある著作のなかで “communities” を “the United States, Britain, Germany, France, Japan, etc.” と同格で結んでいる (Hobson 8)。中道派の代表的理論家ケインズと親しかっただけでなく、夫レナードを通じて Hobson と接触があったウルフも、こうした語用法の圏内にいたとみるべきだろう。『灯台へ』にはコミュニティという言葉が 2 回使われているが、その際にウルフが問うていたのはユートピア的共同体の可能性というより、個人と社会、または個人と国家の関係だったのではないだろうか。

ラムジー夫人の「単純」とリリーの「複雑」

1927 年に出版されたウルフの 5 作目の小説『灯台へ』はそれぞれ “The Window”、“Time Passes”、“The Lighthouse” と名付けられた 3 つのパートから構成されている。大戦以前を描く第 1 部ではラムジー夫人が登場人物たちを招いて晩餐会を開く。はじめのうちは参加を億劫がり、内心では早く帰って仕事に戻りたいと考える招待客たちだったが、最終的に晩餐会は成功を収める。招待客たちが去った後、ラムジー夫人は改めて会の成功を振り返る (引用中の下線は発表者による)。“... and she felt, with her hand on the nursery door, that community of feeling with other people which emotion gives as if the walls of partition had become so thin that practically (the feeling was one of relief and happiness) it was all one stream...” (115)。今晚のことは皆の記憶に残り続けるだろうと考えたラムジー夫人は “community of feeling with other people” を感じる。晩餐会の余韻として感じられるこの「コミュニティ」はしかし個人間の差異を本当に消去してしまうわけではなく、有機的な一体感 (“one stream”) と個人主義 (“walls of partition”) とが絶妙なバランスを保っている。ここでラムジー夫人が感じている幸福感は、コミュニティの利益と個人の自由は両立可能だと考えるニュー・リベラリズムの理想と通底しているのだ。

第一次世界大戦を含む 10 年間を扱う第 2 部を経て、大戦終結直後に設定された第 3 部では、ラムジー氏が年少の子どもたちを連れて洋上の孤島にある灯台へと出発する一方で、画家のリリー・ブリスコウは 10 年前に構想して、結局完成させられないままになっていた絵の制作を再開する。リリーはしかし、構想の段階では「単純」に思っていたことが、キャンバス上に実現しようと試みた途端に「複雑」なものになってしまうことを思い知る。“Where to begin?—that was the question All that in idea seemed simple became in practice immediately complex . . .” (161)。やがてリリーの意識にはラムジー夫人と過ごした記憶がよみがえってくるのだが、リリーはラムジー夫人に単純さの概念を結びつける。“That woman sitting there writing under the rock resolved everything into simplicity; made these angers, irritations fall off like old rags; she brought together this and that and then this . . .” (164)。この対比は、ラムジー夫人とリリーの性格的な違いにとどまらず、二人の世代的な違いを表してもいる。『灯台へ』の先行研究では、ラムジー夫人がヴィクトリア朝的な古いジェンダー観を体現し、リリーが 20 世紀的な新しいそれを代表してい

るという解釈が一般的である (Vadillo 123)。だが、ここで問題となっているのはジェンダー観だけではない。絵画制作においてリリーが直面する「複雑」は、ニュー・リベラリズムが説いた調和的なコミュニティの理想を信じていることができるほど単純＝無邪気 simple ではいられなくなった戦後世代の苦境と対応している。

第3部におけるパブリックとプライベートの分離

ラムジー夫人が作り出す融和の瞬間は「ほとんど芸術作品のよう」(164) だったとも考えるリリーではあるが、ラムジー夫人の「芸術」と彼女の芸術は同じものではない。キャンバスに向き合ったリリーは次のように感じてもいた。“Here she was again, she thought, stepping back to look at it, drawn out of gossip, out of living, out of community with people into the presence of this formidable ancient enemy of hers—this other thing, this truth, this reality. . .” (162). ラムジー夫人が作り出す「芸術」がコミュニティそのものであるのに対し、リリーの芸術はむしろ人々との「交流」“community” から身を引き離れた時に可能になるものなのだ。小説の最後、リリーは自分の作品について “It would be hung in the attics, she thought; it would be destroyed. But what did that matter?” (211) と考える。自分自身をコミュニティから追放した芸術家は、自分の作品がコミュニティから正当な評価を受けることを期待できない。リリーにとって、絵画の制作 production は本人にとってのみ意味を持つごくプライベートな営みとなっている。リリーの隣で読書をしている詩人のカーマイケルについて、リリーと同じく同性愛的な傾向が示唆されているのも偶然ではない。2人ともコミュニティという生殖＝再生産 reproduction のサイクルから疎外された芸術家なのだ。

第3部の半分が女性芸術家の自己実現の物語だったとすれば、もう半分はコミュニティの再建についての物語である。ラムジー親子の灯台までの航海は、親子の融和によって家庭というコミュニティを修復する象徴的行為であると同時に、ラムジー家の別荘と灯台というふたつの「家」をつなぐことで中上流階級と労働者階級との関係を回復させ、イギリス社会というコミュニティを再建する象徴的行為でもある (Tratner 56)。ラムジー氏らが灯台に届けようとする小包が茶色であることは、第1部でラムジー夫人が灯台守の子どものために編んでいた靴下が赤茶色であったことを連想させ、夫人のパブリックな精神が (ソビエトを連想させる「赤」を脱色した上で) 生殖＝再生産のサイクルによって今後も継承されていくことをも予感させる (33, 158)。

第一次世界大戦が提起したコミュニティと個人の間をめぐるとの問いに対する政治的・経済的回答が 1920年代の中道派リベラルが提唱した、公的事業と民間事業との併存であったとすれば、『灯台へ』の第3部は同じ問いに対する文学的回答となっている。両者に共通するのは、問題を「あれかこれか」の二者択一ではなく、パブリックとプライベートの適切な線引きによって処理しようとする態度であり、「問題なのはマッスとマッス、光と影の関係なのだ」というリリーの絵画理論はこれのアレゴリー的な説明となっている (56)。

おわりに

ニュー・リベラル的なコミュニティの理想が失効した第一次世界大戦後の世界に対して、『灯台へ』の第3部はパブリックとプライベートを分離して住み分けを行うという中道派リベラル的な方策を提示する。しかし、この回答はウルフをずっと満足させておくことはできなかったようだ。たとえば1937年出版の小説 *The Years* は当初、Pargiter 家をめぐるとの物語と女性の社会的地位について分析した論文とを交互に組み合わせた “novel-essay” として構成されていた、だが結局この構成は断念され、*Three Guineas* という別の本が書かれることになる (Lee 638)。こうした試行錯誤はウルフが『灯台へ』において自分が提出した個人と社会、文化と社会という二分法を乗り越えようと苦闘していたことを示唆している。

1920年代のリベラリズム言説と『灯台へ』を並列することで本発表が示そうとしたのは、ウルフにおいて、コミュニティは既存の社会に対するオルタナティブというより、ほとんど社会そのものとして想像されていたのかもしれないという可能性であった。現代の批評はウルフ作品の中に現行の社会に対する代替物としてのコミュニティを探し出そうとしがちだが、コミュニティを社会や国家とは異なる、小規模で限定的な集団として想像するという事態そのものが歴史的なものであり、それはウルフの時代においてはまだ当たり前のことではなかったのである。

参考文献

Freeden, Michael. *Liberalism Divided: A Study in British Political Thought 1914-1939*. Oxford UP, 1986.

Hobson, J. A. *The Morals of Economic Internationalism*. Houghton Mifflin Company, 1920.

Lee, Hermione. *Virginia Woolf*. Vintage, 1997.

Liberal Industrial Inquiry. *Britain's Industrial Future*. Ernest Benn Limited, 1928.

Tratner, Michael. *Modernism and Mass Politics: Joyce, Woolf, Eliot, Yeats*. Stanford UP, 1995.

Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. 1927. Harcourt, 2005.

Vadillo, Ana Parejo. "Generational Difference in *To the Lighthouse*." *Cambridge Companion to To the Lighthouse*, edited by Allison Pease, Cambridge UP, 2015, pp. 122-135.